アンサンブル ディマンシュ

第 81 回演奏会

2017 年 9 月 23 日（土）
タワーホール船堀　大ホール

【プログラム】

ヨハネス・ブラームス

ハンガリー舞曲第 1 番　ト短調

ヴァイオリン協奏曲　ニ長調　op.77
第 1 楽章：Allegro non troppo
第 2 楽章：Adagio
第 3 楽章：Allegro giocoso, ma non troppo vivace - Poco piu presto

♪ 休憩 ♪

交響曲第 2 番　ニ長調　op.73

第 1 楽章：Allegro non troppo
第 2 楽章：Adagio non troppo - L'istesso tempo,ma grazioso
第 3 楽章：Allegretto grazioso（Quasi Andantino）- Presto ma non assai - Tempo I
第 4 楽章：Allegro con spirito

【プロフィール】

ヴァイオリン独奏　戸澤 哲夫

東京藝術大学を経て、同大学院修士課程を修了。この間、読売新聞社主催新人演奏会に出演。

大学院在学中の 1995 年より東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスターの任にあり、テレビ朝日「題名のない音楽会」でも馴染みの顔となっている。

1994 年アルベリ弦楽四重奏団を結成、ベートーヴェンの室内楽作品全曲演奏に 7 年越しで取り組む。1996 年には安田弦楽四重奏団に加わり、ペーター・シュミードル氏等共演者も数多い。

各地でのリサイタル活動に加えてオーケストラとの共演も数多く、これまでに東京シティ・フィルをはじめ、東京フィルハーモニー交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、日本センチュリー交響楽団、広島交響楽団などと共演を重ねている。

1998 年より 1 年間ドイツ・ベルリンに留学、ライナー・クスマウル氏のもとで研鑽を積む。

2001 年にメンバーとなったモルゴーア・クァルテットでは、「1 夜でのショスタコーヴィチ弦楽四重奏曲 15 曲全曲演奏会」という大胆な試みや、プログレ名曲をカバーしたアルバム「21 世紀の精神正常者たち」、「原子心母の危機」に続き「トリビュートロジー」を今年 3 月に発売、前 2 作と同様 Amazon ヒットチャート 1 位を獲得するなど、斬新な切り口での活動が大きな反響を呼び、2010 年度アリオン賞、2015 年第 14 回佐川吉男賞奨励賞を受賞。

国立音楽大学及び日本大学藝術学部非常勤講師、マエストローラ音楽院講師。

指揮　平川 範幸

1987 年福岡県出身。福岡教育大学音楽科卒業。

上野学園大学研究生〈指揮専門〉にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣氏に師事。また、パーヴォ・ヤルヴィ、沼尻竜典の各氏の指揮講習会を受講。これまでに、音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。

2012 年度、新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京の下で活動する。2013 年度より 2 年間、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎の各氏の下で研鑽を積む。

これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、大阪交響楽団、浜松フィルハーモニー管弦楽団などのプロ・オーケストラを指揮する。また、各地のジュニアオーケストラや学生オーケストラ、吹奏楽団、合唱団を指揮する。

2016 年度より、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督を務める。

【曲目解説】

ハンガリー舞曲第１番　ト短調

1853年、20歳の年にブラームスはハンガリー出身のヴァイオリニスト、レメーニと演奏旅行を行いました。この演奏旅行はヨアヒムやシューマンとの出会いに繋がったのですが、レメーニからハンガリーのロマ（ジプシー）の音楽を教えてもらったことでも、ブラームスの生涯に大きな影響を与えたと言えるでしょう。彼はその後ハンガリーの音楽に深く興味を持つようになっていったそうです。

ハンガリー舞曲は、時を経て1869～1880年に21曲のピアノ連弾譜として出版されました。ブラームスはこれを編曲として、作曲者名を入れず、作品番号もつけていませんが、レメーニから教えてもらった旋律が多く入っているということです。

本日演奏する１番はブラームス自身により、1873年管弦楽に編曲されましたが、エジソンから依頼されてブラームスの演奏で録音が行われたという逸話もあります。

この曲を練習してみると、指揮者からのちょっとした指摘で曲想が変わっていくことに気がつきました。短い曲ですが、何度か訪れる曲想の変化も楽しんで頂けたらと思います。

（misola）

ヴァイオリン協奏曲　ニ長調　op.77

この曲はブラームスの創作活動が頂点に達した1878年、イタリア旅行の帰りに滞在した避暑地ペルチャッハで作曲され、1879年１月１日に、ヨーゼフ・ヨアヒムの独奏、ブラームス指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団によって初演されました。

第１楽章は、前奏の後、内に秘められて様々な感情が凝縮されているような旋律でヴァイオリンソロが始まります。この感情は、木管楽器との絡みの中で次第に解きほぐされつつ進展し、さらに第１主題、第２主題へと展開されていきます。このような巧みで美しい展開の中では、オーケストラ奏者は、それぞれ自らの感性に基づいたイメージを想像しつつ演奏しますが、それが音となって重りあった時、それは非常に美しく、独特の色合いを持つ音楽になります（なるはずです？）。第１楽章は、その後、凝縮されていた感情とそれを解きほぐす過程がさらに多様な形で進行し、楽章の終盤において、ようやく凝縮されていた感情の中にある美しい部分が見え、心の出口が見つかります。カデンツァの最終部分では、出口が見つかった安心感が表され、安心感が見つかった幸福感の中で楽章が終わります。

第２楽章は、当初構想されていたスケルツォと緩叙楽章をやめ、初演の直前に、三部形式の中間楽章に差し替えられたものです。出だしはオーボエによる美しい旋律で始まります。それは、ヴァイオリン協奏曲におけるオーボエのソロとしては結構長いものであり、サラサーテはこの部分に対して、「美しい音楽だけれども私はステージ上でぼんやりと立っていないといけない」という言葉を残しているほどです。ただ言い換えれば、それを言わしめてなお余りあるほど情緒的で美しい旋律であるということでしょう。それに続くヴァイオリンソロは、さらに情緒的なメロディで曲を繋ぎ、次第に感情的な起伏の激しさが感じられるパッセージへと進んでいきます。この楽章は１楽章で到達した境地をヴァイオリンの本質的な魅力をもって表したものといえるでしょう。

第３楽章は、ハンガリアン・ダンスに基づいたものとなっており、これがロンド主題となって何度も出てきます。自らの心の中の美しい部分が見えた安心感は、弾けるようなリズムとなり、ソリストの技巧がそれを表現し、その流れは最終部のコーダでトルコ行進曲風のリズムとなって終結に向かいます。

では本日の戸澤哲夫氏のソロ、そして指揮・平川範幸氏と我々アンサンブル・ディマンシュの競演をお楽しみください。

（1stVn. Do-Ray）

交響曲第２番　ニ長調　op.73

本日最後にお送りする本作は、ブラームスが1877年に2番目の交響曲として作曲しました。本作に先立つ交響曲第1番が、構想から完成までに20年余りの時間を要したことは有名ですが、本作はわずか4ヶ月で完成されています。完成に要した時間だけでなく、その曲想についても、この2つの交響曲は大きく異なっており、交響曲第1番がティンパニの刻みに導かれ、複雑な和音構成により荘重に幕を開けるハ短調の作品であるのに対し、本作はホルンのデュオによる牧歌的な旋律で幕を開けるニ長調の作品となっています。

さて、本稿の筆者は当団のホルン奏者です。本作には、先述の第一楽章冒頭のデュオ（1回目は1，2番ホルン、2回目は3，4番ホルン）、第一楽章終盤や第二楽章のソロ、そして第四楽章クライマックスに現れるパッセージ（これについてはむしろトランペットの見せ場か？）などホルンの見せ場が多いことから、「ブラームスの交響曲第2番と言えば、ホルン！」という、プログラム編集の指名により、本稿を「ホルン奏者の目線で」執筆しています。

さて、オーケストラには様々な楽器が登場しますが、作曲家ごとに好きな楽器は間違いなく存在していたのではないかと思います。一方、作曲家のオーケストレーションの優劣が論じられる機会は少なくありませんが、それと近しい話として、オーケストレーションの癖とでも言いましょうか、好きであるが故なのか、ホルンの譜面が余りにも「美味しい」、が、「しんどい」ものに仕上がっている作曲家も少なくありません。これを個人的に「ホルン愛が重すぎる作曲家」と呼んでおり、その筆頭に挙がるのが、グスタフ・マーラーやリヒャルト・シュトラウスです（あくまで個人の感想です）。

ちなみに、アメリカの現代の作曲家（元ホルン奏者）に、とある楽団から委嘱を受けた際、大学時代のホルンのライバルが在籍していたことから、ホルンに超絶技巧を求める作品を完成させ、溜飲を下げた、などという全く笑えないエピソードがある強者もいますが、マーラーたちの譜面の上にあるのはあくまで重すぎる愛だと信じています。

さて、話が逸れましたが、ブラームスのホルン愛はというと、非常に適切な熱量を持ったものとなっており、演奏する側としてもそれに適切に応えようというモチベーションが高まるものとなっているのではないかと思います（繰り返しますが、あくまで個人の感想です）。

そんな作品を、ホルン・セクションはじめ、団員一同精一杯演奏させて頂きますので、是非最後までお楽しみください。

（本一色ゆりあ）

【第 81 回メンバー】

第 1 ヴァイオリン　久津見眞理、笹沢幸生、三瓶政一、☆時山響子、西村　実、本山まり子
第 2 ヴァイオリン　石嶺寿子、関根佳子、高野枝里、中村文樹、町田めぐみ、♪森　未知
ヴィオラ　柴野かおり、下山純也、♪関口孝司郎、千秋和久、山口　彰
チェロ　大宮哲朗、♪緒方　淳、久津見靖彦、中山憲一、三次摂子
コントラバス　江川博之、♪須賀敬亮

フルート　上野京子、谷口玲子、徳植俊之　**オーボエ**市川亜理、山口高司
クラリネット　浅井昭成、星野尾裕一　**ファゴット**　越島康太郎、星野未央
ホルン　小磯　治、町田明子、森合利之、森　真一
トランペット　鴨狩公一、薗部晴信
トロンボーン　伊東宏之、桜田健彦、中野裕司　**チューバ**　鶴間義徳
ティンパニ　星野武徳、古立匠
練習指揮　山上孝秋

☆：コンサートマスター、♪：弦楽トップ

♪ 次回の演奏会ご案内 ♪

日時：2018 年 2 月 17 日（土）14:30 開演
場所：さいたま芸術劇場　音楽ホール
指揮：平川 範幸
曲目：メンデルスゾーン　「静かな海と楽しい航海」　作品 27
　　サン＝サーンス　交響曲第 2 番　イ短調 作品 55
　　モーツァルト　交響曲第 41 番「ジュピター」ハ長調 K.551
詳細は HP　http://www.e-dimanche.jp/　をご覧ください。
※招待券ご希望の方はアンケートにご記入いただくか HP よりお申込みください。